台大日本語文研究第 27 期
2014 年 6 月，頁 77-108
2014-03-26 收稿，2014-05-10 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2014.27.77

能否擺脫國家桎梏的日本語教育？
－以戰時井伏鱒二的語言意象為主－

倉本知明*

摘要

井伏鱒二是針對語言含藏的政治性非常敏感的作家。太平洋戰爭初期，井伏身爲陸軍宣傳部隊被派遣到馬來西亞及新加坡，當時的從軍經驗及日軍的占領政策更使得井伏體會語言蘊藏的政治性。本論文以其爲背景，分析曾被派遣到南方占領地區的井伏如何描寫及接觸在外地遇到的怪異日本語。爲了進行分析，以井伏在抗日時期創作的短篇小說＜阿槌和九郎治仔吵起架來，我苦於用詞＞（1937 年）爲起點，探討井伏如何描述在其作品當中的國語與描寫南方占領經驗的小說＜花之町＞（1942 年）之中的日本語所共同蘊藏的政治性，接著探討井伏如何將兩者串聯起來描述。

經過分析，本文按照上述作品試圖探究離開國家桎梏的「日本語」教育的可能性。戰敗之後隨著高度經濟成長，日本語教育再度席捲亞洲各區，假使失去國家作爲強力骨幹，日本語教育能否支撐得下去？由前述內文中描寫的「國語」教育及「日本語」教育所含有的連續性和同化主義傾向之結果，此疑問得以明朗化。

關鍵詞：國語、日本語教育、新加坡、日本精神、他者性

* 文藻外語大學日本語文學系助理教授

Can Japanese Language Education free itself from the Shackles of the Nation?: Language Images of Ibuse Masuji during the War Time

Kuramoto, Tomoaki*

Abstract

The writer Ibuse Masuji was very sensitive to the political dimension hidden in the language. During the early Pacific War, Ibuse was sent to Malaysia and Singapore with the army propaganda troops. His experience in the army and the occupation policies of the Japanese army helped him to perceive the politics hidden in the language.

Based on this background, the thesis analyses how Ibuse, who was sent to the South occupation area, described and encountered the strange Japanese language abroad. The analysis begins with “Tsutisa had a fight with Kurojisan and I was unable to find the right words”, a short story Ibuse wrote during the Anti-Japanese Campaign. The thesis explores the way that Ibuse described “the national language” in the story and the politics hidden in the Japanese language in “Flower’s Town”, a novel about the south occupation experience. The study analyses how Ibuse connected the two writings together.

After analyzing the abovementioned works, the researcher looks for the possibility of “Japanese education” breaking away from the historical shackles of the nation. After losing the war, the fast growing economical miracle in Japan brought the Japanese language education

* Assistant Professor, Wenzao Ursuline University of Languages Department of Japanese

back to Asia again. Could this Japanese language education continue when it loses the nation as its strong support?

Keywords: National language, Japanese language education, Singapore, Japanese spirit, otherness

国家の軛を離れた「日本語」教育は可能か？
—戦時期、井伏鱒二作品における言語表象を中心に—

倉本知明*

要旨

井伏鱒二は言語が持つ政治性に極めて敏感な作家であった。太平洋戦争初期、陸軍の宣伝部隊として派遣されたマレー・シンガポールにおける従軍経験とその後の占領政策は、言語が持つそうした政治性をより強く井伏に自覚させるものだったが、本稿ではこうした問題意識を背景として、南方占領地域に派遣された井伏鱒二が「外地」で出会った「異形」の日本語を如何に描き、またそれにコミットしていったのかについて分析するものである。その起点として、井伏鱒二が日中戦争勃発後に執筆した「『槌ツア』と『九郎冶ツアン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」（1937年）を取り上げ、またそこで描かれた「国語」と南方での占領経験を描いた「花の町」（1942年）における「日本語」が共通して孕んでいた政治性を井伏が如何に描き、また両者を関連させていったのかを考察する。

こうした分析を経た上で、本稿では戦後の高度経済成長とともにアジア各地へと再進出していった「日本語」教育が、その強力なバックボーンであった国民国家の枠組みを離れて発展する可能性があるのかどうか、前述した二つのテクストに描かれた「国語」教育と「日本語」教育の持つ連続性とその同化主義的傾向を洗い出すことによって明らかにするものである。

キーワード：国語、日本語教育、シンガポール、日本精神、他者性

* 文藻外語大學日本語文學系助理教授

国家の軛を離れた「日本語」教育は可能か？
—戦時期、井伏鱒二作品における言語表象を中心に—

倉本知明

一、はじめに

敗戦後、日本では戦前帝国臣民を形作っていた「国語」教育は、東京裁判において日本の植民地主義や軍国主義を煽った「戦犯」として処刑されることなく、むしろ戦後新たに誕生した民主国家に相応しい国民の育成を担うものとして期待されてきた[1]。当用漢字や現代仮名遣いの制定など、「国語民主化」の掛け声の下で断行された一連の国語改革を通じて戦後再出発を果たすこととなった「国語」教育は、かつて外地と呼ばれた植民地や広大な海外占領地を失い、列島規模の新生日本を再統合する上で大きな役割を果たしてきた[2]。一方、満州事変から太平洋戦争にかけて、広大な占領地の異民族を統治・支配するために生まれてきた「日本語」教育は、戦後は高度経済成長の流れに乗って、かつての「東亜共通語」としての地位を復権するようにアジア各地に再進出を果たしてきた。しかし、戦後におけるこうした「国語」や「日本語」教育の急速な復権は、とりもなおさず戦前との連続性を不可視化させ、またそれ以上に「国語」と「日本語」教育双方が内在していた同化主義的な教育システムを見えにくくさせてきた[3]。

---

1 西川長夫は、かつて多文化主義をめぐる考察の中で「植民地主義的でない日本語教育は可能か」といった問いを立て、従軍慰安婦をめぐる日本の戦争責任と並べて、かつて日本国内や植民地において言語や文化の抑圧と抹殺に手を貸してきた国語、日本語教師たちの責任問題について提起している。（西川長夫「戦争の世紀を越えて－グローバル化時代の国家・歴史・民族」平凡社 2002 年、245 頁）

2 保科孝一など、戦前から戦後にかけて国語改革を進めた国語学者たちの中には、敗戦によって朝鮮や台湾、沖縄といった旧植民地が日本から「離れた」結果、「文化的国語政策」が新生日本にとって重要な意味を持つようになったとして、それまで異民族を包接していた「国語」が日本民族の言語として機能するようになったことを歓迎する発言を述べる者もいた（保科孝一「新生日本の国語政策」『思潮』一巻三号、1946 年 9 月）

3 「国語」と「日本語」のこうした関係性については、子安宣邦の「『国語』

こうした点に関して、戦前・戦後を跨いで言葉をめぐる作品を発表し続けた井伏鱒二は、ある点では国語学者以上に言語が持つ政治性に極めて敏感な作家であった。それは、彼が「国語」による創作が当然とされていた時代の中で、敢えて自身のお国言葉をテクストに多用したことがその理由ではなく、むしろ国民国家形成を支えた「国語」と満州事変から太平洋戦争へと至る帝国的膨張の中から生まれてきた「日本語」そのものへの懐疑がその背景にあった。

太平洋戦争初期、陸軍の宣伝部隊として派遣されたマレー・シンガポールにおける従軍経験とその後の占領政策は、言語が持つそうした政治性をより強く井伏に自覚させるものだったが、本稿ではこうした問題意識を背景として、南方占領地域に派遣された井伏鱒二が外地で出会った「異形」の日本語を如何に描き、またそれにコミットしていったのかについて分析してみたい。その起点として、井伏が日中戦争勃発後に執筆した「『槌ツア』と『九郎冶ツアン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」（1937 年）を取り上げ、またそこで描かれた「国語」と南方での占領経験を描いた「花の町」（1942 年）における「日本語」が共通して孕んでいた政治性を井伏が如何に描き、また両者を関連させていったのかを考察するものである。

本稿は、こうした分析を通して戦後の高度経済成長とともにアジア各地へと再進出していった「日本語」教育が、その強力なバックボーンであった国民国家の枠組みを離れて発展する可能性があるのかどうかについて、前述した二つのテクストに描かれた「国語」教育と「日本語」教育の持つ連続性とその同化主義的傾向を洗い出すことで明らかにするものである。

は死して『日本語』は生まれたか」（「日本近代思想批判　一国史の成立」岩波書店 2003 年）などに詳しい。

二、「国語」＝「強盗」の言葉といったロジック―「『槌ツア』と『九郎冶ツアン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」（1937 年）―

「国語」による創作が前提とされた近代文学の中に「国語」への懐疑を見ることは難しい。しかし、読者は少なくともそこから「国語」がこの社会に残した爪痕を読みとることは出来る。井伏鱒二は郷里福山の言葉を中心とした方言を作品の中で多く使用したことで有名だが、1937 年 11 月「若草」に発表された短篇小説「『槌ツア』と『九郎冶ツアン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」（以下「『槌ツア』」）は、その中でも「国語」が地域の人間関係に与えた影響の大きさを伺い知ることが出来る作品である。

この短いテクストには、「私」の住む村で起こった「槌ツア」と「九郎冶ツアン」の呼称をめぐる対立を通じて、母親を如何に呼べばいいか「煩悶」する「私」の苦悩が描かれている[4]。従来「私」の村では個人の階級的区別をつける目的から、名前に「サ」、「ツァ」、「ヤン」、「ツァン」（後者ほど社会的地位が低い）など、その地位に応じて様々な呼称法があった。しかし、村長である「九郎冶ツアン」が村会議員である「槌」を比較的低い階級である「槌ツア」の名で呼んだことで両者は一家をあげて激しく対立する。自らの正統性を主張するためにそれぞれ「大阪弁」と「東京弁」を使用し始めた二人であったが、ある日「東京弁」を使用する強盗が「私」の家に押し入ろうとしたことから、「東京弁」を使用していた「九郎冶ツアン」は勢力を失い、また大阪弁を使っていた「槌ツア」もいつしかその使用を諦めることとなる。事情聴取にやってきた警察官に向かって、「私」の祖父は「純粋な東京弁を覚えるためには、われわれ田舎者はすくなくとも二十年ぐらい東京に住む必要がある」と述べ、「東京

[4] 現在一般的に使用されている「お父さん」「お母さん」といった呼称方法は、明治 37（1904）年から全国の小学校で使用された国定教科書「尋常小学校読本」に用いられた言葉で、当時学校教育の場から一般家庭へと普及した「新語」の一つであった。（水原明人『江戸語・東京語・標準語』講談社現代新書 1994 年、94 頁）。「私」が感じていたこうした「煩悶」は、当時地方に暮らす多くの日本人が共通して持っていた違和感であったと思われる。

弁」／「国語」が郷里の村に浸透するには時期尚早だとして、村内の不毛な対立に終止符を打とうとするのだった。

井伏は「『槌ツア』」において、こうした市井の人物の些細な対立を通じて、中央で生まれた「国語」が地方（方言の世界）に侵入し始めた頃の人間関係の変化を克明に描いている。テクストにおける「私」の「煩悶」がもし仮に井伏自身の経験を投影するものだとすれば、物語はおよそ 1910 年前後、明治後期の広島・福山地方を舞台としていることになる。

19 世紀末、世紀転換期の日本は、西川長夫が指摘するように、日清戦争から日露戦争を経て法律や軍隊、出版教育など、国民国家として完成期にあたる時期であり、また植民地獲得によって帝国意識が台頭して国民国家外部へとその領域を広め始めた時期であった[5]。国民国家形成の屋台骨でもあった「国語」教育に関しても、井伏が生まれた翌年（1900 年）には、「国語」がはじめて小学校の正式教科として登場、同年には帝国教育界の「言文一致会」が成立しており、「私」／井伏が生まれ育った明治後期とは、まさに「国語」教育の黎明期でもあったのだ[6]。

テクストにおいて提起された個人の呼称をめぐる「煩悶」や「確執」は、そうした国民国家の基本原理である「国語」が、地方社会の中に浸透したために起こった近代的現象であった。従来あった地域・階級差を解消して均質的一体性を持った「国民」を形成するために創造された「国語」は、学校教育や新聞・出版、軍隊教育など

---

[5] 西川長夫「戦争の世紀を越えて―グローバル時代の国家・歴史・民族」（平凡社 2002 年）243 頁

[6] なお、日本の植民地であった台湾では日本内地よりも「国語」教育の始動は早く、1895 年にはすでに伊沢修二の上呈によって台北郊外に芝山巌学堂が設けられ、台湾人子弟に向けた「国語」教育が開始されていた。芝山巌学堂で試験的に行われた言葉の通じない植民地住民への教育成果は、後に「日本語教授法」（台湾総督府民政局学務部 1895 年）、「新日本語言集甲号」（同前、1896 年）として出版されている。伊沢はここで漢字と台湾語による対訳教授法を確立し、日本において小学校教員の資格がある者を「国語伝習所」の教師として育成する考えを示している。その採用に際して、伊沢は日本人教員自身の国語能力や漢文の読解能力などを重視していた。詳しい研究としては、王秋陽「台湾総督府国語学校の設立と言語教育の推進」『アジアの歴史と文化』（山口大学アジア歴史・文化研究会 2012 年）などがある。

を通じて地方へと浸透されていき、その過程で様々な軋轢や矛盾を生んでいった。村長である「九郎冶ツアン」が「槌ツア」に対抗して「東京弁」を使い始めたのも、「郡役所へ出頭している間に覚えた」ためであって、「国語」が普遍性を持った日常的な言葉ではなく、そこからは「国語」があくまで「お上」から与えられた人工的な言葉であったことを伺い知ることが出来る。多くの村人たちにとって、当時「国語」とは「画期的」でありながら、日常的に使用するのはいまだ「時期尚早」な言葉であったのだった。

「九郎冶ツアン」の試みが村人たちを驚かせたのは、この事件によってそれまで公的領域の言葉であった「東京弁」（「国語」）が、はじめて家庭という私的領域に侵入することになったためであった。「九郎冶ツアン」の試みは、一見封建時代に確立された自らの階級的優位（「ツアン」は「ツア」よりも比較的高い階級の呼称とされている）を否定するもののように見えるが、郡役所に出入りすることの多い「九郎冶ツアン」の目には、こうした旧来の階級的優位よりも、むしろ「国語」を自由に話すことの出来る優位性が高いものとして映っていたに違いない。その点で、「国語」は従来あった階級差を解消するものでありながら、同時に新たな階級差を生み出す言葉でもあったことも見逃してはならない。

「国語」が国民の均質的な同一性や円滑なコミュニケーションを進めるものではなく、むしろ隣人同士の亀裂を生む言葉として描かれ、しかも「強盗」の登場にそれを代表させている点に、読者は井伏の「国語」に対する独特の感性を読みとることが出来る。「国語」創設の黎明期に生まれた井伏はテクストを通じて過去の「国語」を通じた人間関係の変容を描いているわけだが、しかし「私」がその「煩悶」を告白する「現在」（1937 年）においては、「槌ツア」や「九郎冶ツアン」の対立に代表されるような言葉をめぐる「煩悶」はすでに解決済みの問題とされている。物語の冒頭において、母親の呼称にも様々な階級的区別があったことを述べている「私」は、「現在」ではそうした問題はすでに解決され、郷里の子供たちがみ

な母親のことを「オカアサン」と呼んでいることを指摘している。つまり、黎明期を経て成熟期に差し掛かっていた「国語」は、すでに村人たちの日常の中に浸透しており、盧溝橋事件を経て総力戦体制へと向かおうとしていた当時の日本において、子供たちの使用する言語とそれによって生まれる人間関係はすでに国家によって厳重に管理されている状態にあったのだ。方言に強いこだわりを持ち続けた井伏は、言語を通じて「国語」へと回収される個人の姿をこうした市井の人々の瑣末な諍いを通じて描き出したのであった。

三、変化する「強盗の言葉」—「国語」から「日本語」へ—

しかし、井伏はなぜこの時期にわざわざ過去の「国語」が生み出した人間関係の変容について言及する必要があったのか。「『槌ツア』」において「私」が過ごした少年時代が「国語」教育の黎明期でもあったとすれば、私がその過去を回想する現在（1930 年代）とは、まさに「日本語」教育の黎明期であった[7]。

テクストが執筆された 1937 年 7 月、中国では盧溝橋事件が勃発、日本の傀儡政権であった「満州国」では日本の治外法権の撤廃を契機として、各種教育機関における「日本語」教育が本格化されていた[8]。帝国領外において登場した「日本語」教育は、後に太平洋戦争の勃発によって日本軍が広大な東南アジア各地を占領したことで益々その重要性を増していき、当時言語学者たちの従来の「国語」

---

[7] 台湾や朝鮮半島などの植民地ではすでに早い時期から外国人に日本語を教える意味での「国語」教育がなされていたが、それが多様な文化・言語的背景を持った占領地域を支配・統合する「日本語」教育へと舵を切り始めたのは、安田敏朗が指摘するように「1930 年代前半、『満州国』を成立させて『国語』以外の手法で異言語支配を行うようになっ」てからだといえる（安田敏朗「『国語』の近代史—帝国日本と国語学者たち」中公新書 2006 年）

[8] 1937 年の治外法権の撤廃を一つの契機として、満州国は形式的には日本の保護を離れて独立国家の体裁を整えていったが、一方でそれは「満州国の『国体』の日本化、国民精神を天皇制の枠組みに納め入れようとした動き」（石剛「植民地支配と日本語」三元社 1993 年）を加速させるものであった。例えば 1937 年を契機として、満州国では公文書における日本語の正式採用、官吏登用時における日本語能力検定試験の実施、学校教育における日本語の必修化など、日本語教育は満州国の各種機関において次々と制度化されていった。

概念にも大きな影響を与えていった[9]。つまり、「私」が過去の「煩悶」を反復していた時期とは、まさにそれまで内地や植民地を中心に行われていた「国語」教育が、大日本帝国の急速な膨張にともなって「日本語」教育として装いを新たにしようとしてした時期でもあったのだ。

井上ひさしの戯曲「國語元年」をあげるまでもなく、本来国内における多様な地域差や階級差を無くす役割を果たしてきた「国語」教育は、「『槍ツア』」の対立にみるように、結果としてその習得の有無によって共同体内部に新たな階級差を生み出していったが、台湾や朝鮮といった明治期に獲得された植民地においては、排他的性格を持った「国語」教育から生まれる矛盾は就学や就労に際して民族的な格差を生み出し、やがてそれが民族問題へと発展していった。しかし、建前上であれ「五族協和」を謳った「満州国」や、太平洋戦争の勃発によって獲得された東南アジア各地の占領地においては、それは均質的同一性を持った「国民」を養成する「国語」教育ではなく、「東亜諸民族ニ日本国民ト同様ナ考ヘ方ト感動トヲ与ヘ」[10]るための「東亜共通語」＝「日本語」教育として発展・展開していくこととなった。当時、日本の国語政策のリーダー的な存在であった安藤正次など、「国語」の純粋性を守ろうとする国語学者たちは「国語」をめぐる問題を「国家内」問題、「日本語」をめぐる問題を「国家外」問題と位置付けることによって、「東亜共通語」としての「日本語」を帝国の領域外へ普及する際の重要な文化工作の一環として

[9] 京城帝国大学で教鞭をとっていた国語学者の時枝誠記は、明治以降の国語政策を四つの時期に分けて、「日本語」教育が誕生した満州事変から太平洋戦争にかけての時期を「大東亜共栄圏の建設の指導的立場にある日本が、幾多の異民族を包含している共栄圏内に之れが共通語としての日本語を如何に普及していくかの問題を考えるに至った時代である」と考え、「国語」と「日本語」の整合性を問い直そうとした。（時枝誠記「朝鮮に於ける国語政策及び国語教育の将来」『日本語』第二巻第八号、1942 年 8 月）

[10] 1939 年南方への日本語普及対策を検討する目的から「国語対策委員会」が開催、そこでは「此ノ日本語ヲシテ東亜民族ノ謂ハバ慈悲深キ母タラシメ、東亜諸民族ニ日本国民ト同様ナ考ヘ方ト感動トヲ与ヘタイ」と、「東亜諸民族の共通語」としての日本語教育の必要性が叫ばれた。小沢有作「日本植民地政策論」『人文学報』No82 収録（東京都立大学 1971 年）17 頁

位置付けようとしていた[11]。

謂わば、相次ぐ戦争によって急速に拡大した新領土を効率的に支配していく過程で、国語学者たちはそれまで域内の同質性を保証するものであった「国語」教育を現地住民の同化を前提としない（それでいて「日本国民ト同様ナ考ヘ方ト感動トヲ与ヘ」る）「日本語」教育へと切り替える必要に迫られたのだった。そこでは、「強盗」が「強盗」であること自体に変わりはないのだが、それがより中立的な装いをして現れることとなったのだといえる。

しかし、国内の同質性を担保するものであった「国語」教育が国民国家の枠組み（正確には台湾・朝鮮などを含む）を越えて飛躍する際、そこには当然論理の組み換えが必要となってくる。少なくとも傀儡政権や占領当局は、「五族協和」を打ち出した「満州国」や欧米帝国主義からの「解放」を謳った東南アジアの植民地において、帝国への同化を前提とした「国語」教育を行うわけにはいかなかった。そこで日本の当局者たちは本来国内の言語的差異を解消する手段であった「国語」教育を「文明」（普遍性）や「日本精神」（固有性）を体現した言語である「日本語」へと置き換えることで、占領地における言語政策を推し進めようとしたのだった。安田敏朗は、「国語」と「日本語」の差異について、「『国語』という概念が多様なものを統合していくなかで登場したのだとすれば、『日本語』という概念は多様なものとむきあうなかで登場してきた」[12]と述べ、前者を「国語」的原理を基礎とする「国民国家的言語編成」、後者を「東亜共通語」的原理を基礎とする「帝国的言語編成」として分類・定義している[13]。国民国家形成の過程において、均質な「国民」を生み出すために創りだされた「国語」教育が国内の単一性を担保するものであったとすれば、アジア・太平洋地域の植民地獲得と太平洋戦争へと到る帝国化の過程において創り出された「日本語」は、ま

[11] 安藤正次「日本語の進出と日本語の教育」『日本語』第二号（1941 年 4 月）
[12] 安田敏朗「『国語』の近代史　帝国日本と国語学者たち」（中公新書 2006 年）
[13] 安田敏朗「帝国日本の言語編成」（世織書房 1997 年）

さに国外における多様な異民族・異言語を包括的に統治するための政治的手段として生まれたものであった。こうして日本軍とともに南方各地へ「進軍」していった「日本語」教育は、台湾・朝鮮など植民地におけるような言語を通じた苛烈な同化政策が影をひそめる一方で、「日本語」を通じた日本理解といった現在の「日本語」教育にも通底するような教育観が強烈に打ち出されることとなったのだった。

話をもう一度「『槌ツア』」に戻せば、「私」が「現在」において過去の「煩悶」を反復していた時期とは、まさにそれまで主に内地を中心に行われていた「国語」教育が、大日本帝国の急速な膨張にともなって、「日本語」教育として装いを一新することによってアジア各地に普及されようとしていた時期と重なり合っている[14]。つまり、井伏は「国語」が「日本語」として広大なアジア各地の占領地へと飛躍していくまさにそのただ中において、かつて自らが感じた「いかめしさ」や「煩悩」といったものを、「方言」社会に侵入する「国語」とそれによって変容を余儀なくされる人間関係といったものをテクストの内部で反証してみせたのだった。その意味で、日本国内の方言問題を描いた「『槌ツア』」は、決して「国語」／「方言」といった対立軸だけで捉えることは適切ではない。むしろこうした対立と同化の過程のただ中に、いままさに海外へと飛躍していこうとする「日本語」／「占領地言語」といった新たな対立の構図を読みとることが可能なのだ。

そして皮肉なことに、まるで自らが構築したこうした構図をなぞるように、昭和 16 年 11 月、陸軍徴用令書（通称白紙）を受け取った井伏は、翌年 2 月「南方派遣宣伝班員」の一員として詩人の神保光太郎やフランス文学者の中島健蔵らとともに南方占領地へと派遣されることが決定され、以後半年にわたって日本軍占領下にあるシンガポールにおいて日本軍の宣伝・宣撫工作及び「日本語」教育の仕事に携わることとなったのだった。

[14] 脚注 5 に同じ

四、「日本語」＝「日本精神」といった虚構—「花の町」（1942 年）—

当時井伏が派遣されたシンガポールは、数ある南方占領地の中でも人種・民族的多様性に富み、当然使用される言語も一様ではなかった。福建、広東語などの中国南方諸言語に加え、現地語であるマレー語にインド諸語、また宗教言語であるアラビア語に旧宗主国言語である英語など､実に様々な言語が飛び交う植民地都市であった。陸軍宣伝班の一員としてマレー戦線に従軍した井伏は、英軍降伏後に「昭南市」と改名されたこの都市で半年ほど滞在、そのときの経験をもとに執筆され､「東京日日新聞」及び「大阪毎日新聞」に掲載されたのが未完の小説「花の町」（1942 年）であった。

井伏本人をモデルにしたと思われる主人公の木山喜代三は､「昭南市で一ばん大きな建物」である「カセイ・ビル」にある陸軍宣伝班で働く通称「マルセンの旦那」の一人としてテクストに登場する（他にも神保光太郎をモデルにした「神田幸太郎」や中島健蔵をモデルにした「築地弁次郎」などが登場している)。木山はひょんなことから昭南日本学園で「日本語」を学ぶ華僑の少年ベン・リヨンと知り合うが、木山はこのベン・リヨンと彼の家族たちとの交際を通じて占領下にある昭南市の「日常」を終始傍観者的な立場から観察している[15]。

ベン・リヨンにはトミー・リヨンと呼ばれる姉とリヨン・アチャンと呼ばれる母がいたが、ベン・リヨンの姉に恋慕するマレー人男性ウセン・ベン・ハッサンは、何かと口実をつけてはリヨン一家に出入りする。しかし、男手のないベン・リヨンの一家は自力でこの

[15] 井伏が描いたこうした「日常」から一歩離れた場所では、日本軍によるシンガポール華僑の尋問と虐殺が行われており、井伏自身も後の回想の中で「赤土の大広場に何千人もの華僑が集まって、日本の補助憲兵が鉄砲を持って立番しているのを何度か見かけている」と述べている。（井伏鱒二『徴用中のこと』講談社 1996 年）また､「花の町」における井伏の平和的な描写を反戦的か迎合的かと見ることによって、研究者の間では作品の評価は分かれてきた。

ウセン・ベン・ハッサンを退ける術を持たず、「マルセンの旦那」である木山を巻き込むことで何とかこの招かれざる客を懲らしめようとする。木山はたまたまベン・リヨンの家で出会った河野軍曹と共にこの「良民をたぶらかそうとする」ウセン・ベン・ハッサンを退けるが、母親のリヨン・アチャンは長らく自分たちを保護してくれる存在に餓えていたためか、その後何度も木山のもとを訪れては遠慮がちに河野軍曹の行方を聞きただそうとするのであった。

このテクストにおいて、「日本語」教育に関する寓話は重要な位置を占めている。物語に登場する「昭南日本学園」は、当時陸軍宣伝班が中心となって創設された日本語専門の教育機関で、神保光太郎が初代校長を勤めており、その設立には井伏自身も関与していた。「マナベ使へ日本語！」を標語に「正しく美しい日本語」を現地住民に教えることを旨に設立された昭南日本学園では、三ヶ月間の簡単な「日本語」教育を中心として、日本の生活習慣や伝統文化などが教授されていた[16]。「日本語」を通じて「日本精神」や「日本のこころ」を現地住民たちの間に普及させようとしていた占領当局は、「日本語ノ教授ニ当タリテハ躾ヲ重視シ日本的ナル生活態度ノ育成ニ務ム」[17]といったように、「日本語」教育を礼儀と結びついた「躾」の一種と見なすことで現地住民を馴化させようとした。占領当局の肝いりで設立された「昭南日本学園」は、当然こうした「躾」としての「日本語」教育を率先して実践することによって、「単に語学を教授するのではなくして、日本語を通じて、日本を教へ」（神保光太郎）ようとしたのだった[18]。

---

[16] マレーシア・シンガポールの日本語教育内容に関する先行研究としては、川端美樹「第二次世界大戦中の日本植民地・占領地における日本語教育－マレー半島を中心として」『日本語と日本語教育』17（慶応義塾大学国際センター紀要）（1988年）、宮脇弘幸「南方占領地における日本語教育と教科書－マレーシア・シンガポールの場合（1942―1945）」『成城文芸』126（1989年）などが詳しい。

[17] 閣議諒解事項「南方諸地域ニ普及スベキ日本語ノ教育ニ関スル件」1943年9月28日

[18] 神保光太郎「昭南日本学園」（愛之事業社 1943年）から引用。神保光太郎は昭南日本学園において、南方に躍進する「日本語」教育を「大東亜共栄圏」建設に行われる高尚な使命と考え、「若草のやうに繁り、花びらのやうに美

テクストにおいて、「昭南日本学園」の秀才と謳われるベン・リヨンが、木山たち「マルセンの旦那」に会う度に「教室でする「起立・敬礼」の動作をして見」せ、宣伝班の入り口では「オフィサアに一人ずつ敬礼」してみせるのも、こうした「日本語」教育を通じた身体訓練の賜物だといえる。「日本精神を知る一つの方便として、まず手始めに正しい日本文字を書き得るように努力する」と、学校で教えられた言葉をそのまま鸚鵡返しに繰り返すベン・リヨンは、謂わば「日本語」＝「日本精神」といったイデオロギーを掲げた占領当局が求める理想的な「良民」であった。そこでは、植民地における苛烈な皇民化運動とは違ったレベルで行われた言語政策、つまり言語を通じて「日本国民ト同様ナ考ヘ方ト感動トヲ与ヘ」ようとする緩やかな（それでいて「強盗」めいた）同化政策の一端を伺い知ることが出来る。

しかし、テクストにはこうした「日本語」＝「日本精神」といった硬直した図式を破算に追い込むような人物も登場している。ベン・リヨンの姉トミー・リヨンを追いかけるマレー人ウサン・ベン・ハッサンである。トミー・リオンを何とか手に入れようとするウサン・ベン・ハッサンは、日本軍との関係の深さを笠に父親（庇護者）のいないベン・リヨンの家をわがもの顔で訪れていたが、己を懲罰するために突然部屋に姿を現した「マルセンの旦那」（木山）を見てもまるで臆することなく、彼に向かって次のように自らの「日本語」観を披露してみせている。

> 「私、ここのイハノ商会のイハノさんの家に、永く住んでおったですね。戦争になってからイハノさん、インドへ持って行かれて、いまイハノ商会に誰もおらんですね。それから後、私は日本のために活躍したいと思ったです。それで私、日本語をこの家のベン・リヨンに、たびたび来て教えたですね。それでベン・リヨンの日本語は、日進月歩で上達しましたですね。日本

しく広がつてゐる」日本語を通じて、現地住民たちに「日本のこころ」を布教しようとしたと述べている。

精神を覚えるには、日本語を知らんければいけないです。私、日本語を自由に話せるですから、私、もう日本精神をよく覚えておるです。」

「君、無茶をいってはいけない。」

「いえ、無茶でないです。日本語と日本精神のこんな関係において、この前、マルセンのポスターにもちょっと書いてあったですからね。それで私、日本精神普及のためこの家のベン・リヨンにも、その姉のトミーにも、日本語を教えたですからね。トミーはまだ覚えんですが、ベン・リヨンはよく話せるようになったですね。私のおかげです。」[19]

ベン・リヨンが考える「日本精神を知る一つの方便として、まず手始めに正しい日本文字を書き得るように努力する」といった考えと、ウサン・ベン・ハッサンが考える「日本語を自由に話せるですから、私、もう日本精神をよく覚えておるです」といった図式は、基本的には同じものである。しかし、ウサン・ベン・ハッサンが口にしたロジックを聞いた木山は、それを「無茶」だと退けるが、ウサンからは「マルセンのポスターにも書いてあった」とにべもなく反論されてしまっている。結局のところ、ここでは何をもって「日本精神」とするのかは、教育者側の匙加減に過ぎないことが暴露されてしまっているのだ。大塚健洋によれば、「日本精神」といった言葉は満州事変以後の日本で「大和魂」や「国民精神」に取って代わるものとして各種出版物において華々しく登場したが、「これが流行語になると、ファシズムという用語と同じく、その意味がきわめて曖昧なものとなった」[20]と指摘している。

つまり、占領地に派遣された多くの「日本語」教師たちは、普及する当人たちでさえはっきりと理解できていない「日本精神」といった曖昧な概念を現地住民たちに向かって教授する必要に迫られていたのだ。その意味で「日本語」教育と現地学習者たちの間に生じた隙間に、ウサン・ベン・ハッサンのようなこうした機会主義者が

[19] 井伏鱒二「花の町　軍歌『戦友』」（講談社文芸文庫 1996 年）58 頁
[20] 大塚健洋「大川周明 - ある復古革新主義者の思想 - 」（中公新書 1995 年）

登場したのも当然の結果だといえる。しかも、ウサン・ベン・ハッサンの度重なる訪問に悩まされているベン・リヨンの姉トミー・リヨンは、彼のことを悪しざまに「悪魔」と罵っている。トミー・リヨンからすれば、彼女を悩ませるウサン・ベン・ハッサンとは「日本語」学習者に「日本精神」を強制する「日本語」教育の矛盾から生まれ出た「悪魔」でもあったのだ。

実際、もし仮に「日本語」が「日本精神」なるものを代表するのだとすれば、テクストの中で最も「日本精神」を代表している住民は、他ならぬウサン・ベン・ハッサンとなってしまう。「カーキ色の開襟の羅紗服に白シャツの襟を出して着け」て木山たちの前に現れたこの「悪魔」は、「当地駐屯の日本将校または軍政部高官のいでたち」をしており、見ようによっては実体のない「日本精神」が服を来て歩いているようにも見える。

井伏はこうしたウサン・ベン・ハッサンの存在を通じて、「日本語」＝「日本精神」といった図式が持つ虚構を暗に示しているといえるが、更に言えばウサンが象徴する「日本語」話者の家庭／私的空間への侵入は、「『槌ツア』」における「強盗」の侵入とも重なり合うものがある。「国語」を流暢に話す「強盗」は、結局のところ「私」の家に侵入することが叶わなかったが、「日本語」を流暢に話すこの「悪魔」は苦もなくベン・リヨンの家へ侵入して彼らの安寧な生活を破壊している。家庭の中で一番年若いベン・リヨンだけが、その「悪魔」の言葉を積極的に吸収することによって、家庭の平穏を乱すこの「悪魔」から家族を守ろうとしている。また、ウサンを追い払う「庇護者」として登場する木山や心優しい河野軍曹らは一見ベン・リヨン一家をこの「悪魔」から守ってやろうとしているように見えるが、結局のところその「悪魔」にリヨン一家侵入への免罪符を与えているのは他ならぬ彼ら自身の存在であるのだ。

「国語」に内包された同化主義的な教育システムをひきずって誕生した「日本語」は、安藤正次の言うような「国家外言語」、あるいは「東亜共通語」としてその超民族的な性格を目指して誕生しなが

ら、その占領地において「日本精神」の高揚など同化主義的な側面を完全に拭い去ることは出来なかった。むしろ、安田敏朗が指摘するように、占領当局は「『近代』・『文明』・制度を担う言語がすでに東南アジアでは宗主国言語として存在していた」[21]ために、「欧米の思想と異なる『指導国家』の言語かつ『日本精神』を体現する」とされる「日本語」教育の持つ精神性を殊更強調する必要に迫られたのだった。しかし、そうした語学教育に付随された精神性こそが、ウサン・ベン・ハッサンに代表される「悪魔」の存在であり、また占領下といった非対称的な関係性の中で実施された「日本語」教育そのものであったのだ。

五、誰が正しい「日本語」を話すのか？

占領地の宣撫工作の一環として「日本語」を広めることを目的に設立された「日本昭南学園」に身を置く神田幸太郎、また占領地の宣撫政策を担当する「陸軍宣伝班」で働く木山喜代三たちは、日本の占領下にある昭南市において、しばしば「間違った」日本語を目にしている。例えば、テクストの冒頭で述べられる看板をめぐる誤解と衝突などがその代表的な例である。

テクストではベン・リヨンが書いた「ダイトーア、コットーハンバイギョー」といった骨董屋の看板の他に、日本語の全く理解出来ない「西洋人の顔かたち」をした華僑校長が書いた「ポーイズ・スクール」といった奇妙な看板などの寓話が随所に登場している。例えば、件の小学校校長が書き損ねた看板の誤字を訂正した帰り道、神田幸太郎は人力車の車上で木山に次のような事例を出しながら、現地住民への「日本語」教育の不徹底ぶりを語っている。

> 「しかしだね、ベン・リヨンが、コット、ウを、コットーと書いたのはまだ恕すべき点があるようだね。ブラスバサ・ロードの或るマライ人の眼科医院は、看板に『メノクスリ・メグスリ・メノイシャ・メノカイフク』と幾通りも片仮名で並べて書いて

[21] 安田敏朗「帝国日本の言語編成」、前掲 287 頁。

いるんだ。たぶん辞書か何か見て、片仮名をたくさん抜書きしたんだろうな。その看板を僕が見たのが、この前の週の日曜日で、僕はその医者に面会を求めて注意してやった。『ガンカセンモン』と注意してやった。ところが、その翌日、月曜日に見ると『ガンカメイシャセンモン』と書いている。それで、また面会を求めたが、ちょうど患者が来ておった。眼科専門だというのだが、検温器を患者の口の中に含ませておった。」[22]

おそらく、こうした日本語看板にみられる誤字・脱字といった問題は、現在台湾や東南アジアを旅行したことのある日本人なら誰でもある程度見慣れた光景かもしれない。意味の通じない日本語や平仮名の羅列を看板や商品名にして売り出している商店はかつてごまんとあったし、今でもそういった看板を目にすることはそう難しいことではない。だが問題は、井伏はなぜこうした看板の誤字問題をここで殊更取り上げる必要があったのかということだ。そこには占領地における「日本語」教育黎明期に現れた些細な「過ち」を「国語」話者である内地の読者たちに向かって記述しようとしたに過ぎないのであろうか。

この問題を考えるに当たって、再度「国語」教育の黎明期に起こったドタバタ劇を描いた「『槌ツア』」に目を向けてみよう。かつて「槌ツア」と「九郎冶ツアン」は、「国語」によって新たに再編されようとしていた村内秩序の中で、互いに相手よりも「正しい」言葉を話すことで、少しでも優位に立とうとしていた。「国語」を話せない二人は、それぞれが正しいと思う言葉を乱用することによって従来の封建的身分秩序から脱して、国民国家における新たな階層の中へ自らを位置づけ直そうとしたわけだが、彼らがそうして言葉にこだわった背景には、正しい言葉を話すことが自らの正当性を主張する上で非常に重要であると強く信じていたためであった。その点から考えてみれば、英国植民地から日本軍占領地へと秩序再編のただ中にあったシンガポール（昭南市）の住民たちとは、まさに何が正

[22] 井伏鱒二『花の町　軍歌「戦友」』（前掲）28‐29 頁。

しい言葉なのか右往左往していた「国語」教育黎明期の「槌ツア」と「九郎冶ツアン」を彷彿とさせる存在である。「ダイトーア、コットーハンバイギョー」といった看板を店先に掲げるシンフハの老人にしろ、「メノクスリ・メグスリ・メノイシャ・メノカイフク」といった如何にも舌が縺れそうなほど冗長な看板を店先に掲げるマレー人眼科医にしろ、「日本語」を自らの身を守るための「護符」代わりに掲げているといった点以外に、そこには（彼ら自身が「日本語」を正しく理解しているかどうかは別にして）、新たな権威を自らの中に取り込むことによって少しでも隣人や競合者たちとに差をつけようとする「庶民」的な心象が見えなくもない。つまり「花の町」において、井伏は看板に描かれた数々の「誤字」を通じて、「日本語」によって新たな秩序が再編されようとする「昭南市」における言葉の「正しさ」をめぐる問題、言語の正統性に関する問題を再び問いかえそうとしているのだ。

ただ、「花の町」と「『槌ツア』」と大きく異なるのは、「『槌ツア』」においては誰が正しい言葉を話しているのかといった評価基準が少なくともテクスト内部において存在しなかったのに対して、「花の町」では正統性を持つ（と考えられている）「国語」話者（木山喜代三や神田幸太郎）たちが、ベン・リヨンたち「日本語」学習者たちの「誤った日本語」を「正しい日本語」に矯正するといった立場に立っている点である。ある意味で、「マルセンの旦那」である木山や「昭南日本語学園」の校長である神田幸太郎たちは、正しい「日本語」を図らずも暴力的な方法で占領地住民たちに教授する「強盗」の立場に立っているのだ。しかしこうした暴力的な立場にあるからこそ、彼らは「正しい」日本語とは何かといった価値基準を定め、また「日本語」教育にはらまれた矛盾を、「花びらのやうに美しい」（神保光太郎）ものとして覆い隠すことが出来たのである。

一方で、テクストにおいてこうした「正しい」国語話者たちが、皆どこかの地方出身者であることが特記されていることは注目に値する。例えば、正しい「日本語」を教授する立場にある神田幸太郎

は、「大きな声でいわないと、自分で匿そうとする山形弁が益々はっきり顕われる懼れるがある」人物とされているし、志願軍属の花園洋平の生国は「九州福岡」、木山と意気投合した河野軍曹は「少し関西訛りのある日本語」を使う人物として描かれている。謂わば、日本軍内部の多様な出生地とそこにあるべきはずの言語的多様性が、「日本語」学習者と向き合う「国語」話者という図式の下に完全に隠されてしまっているのだ。

戦前／戦後を通じて、井伏作品に登場する「方言」は、戦争といった「公的」活動に駆り出された「庶民」たちのわずかに残された「私的」空間を保証するツールとしてしばしばテクストに登場してきた。例えば、前田貞昭は陸軍宣伝班に籍を置いていた頃の井伏の作品を分析する中で、テクストに現れた兵士たちの使用する「方言」を「観念的伸び上がりを拒否して等身大において自己を表現できる」ものと位置付けることによって、勇壮な「兵士」が戦場において一人の「庶民」へと戻っていく姿を捉えようとした[23]。国家によって統制されきれていない「方言」には、ときに「国語」によって絡めとられた「思想」からは逸脱した「思想」の欠片が零れ落ちることがある。南方での従軍中に創作された「敵弾が作った池のほとりにて」(「写真週報」1942 年 3 月）と題された短い小品の中で、井伏はコンクリートの橋に落とされた爆弾が作った池を前に、「戦争は贅沢ぢや」と「方言」によって戦争への不満を何気なく口にする兵士たちの姿を描写しているが、同様の反戦「思想」をこの兵士たちはおそらく「国語」を使って口にすることは出来なかったはずだ[24]。謂わば、井伏作品において「方言」とは、公的空間の中で雁字搦めにされた者たちがつぶやくことの出来る最後の私的空間でもあったのだ。

---

[23] 前田貞昭「井伏鱒二―戦争を拒絶する文体―」神谷忠孝、木村一信編『南方徴用作家　戦争と文学』(世界思想社 1996 年)

[24] 同様の描写は戦後に描かれた「遥拝隊長」(1950 年）にも見られるが、ここで「方言」によって反戦「思想」を思わず口にしてしまった兵士は、熱狂的な軍国主義者であった「遥拝隊長」から平手打ちを喰った後、突然発進した軍用車から落ちて命を失っている。

しかし、「花の町」では登場人物たちの多くが地方出身者であることが仄めかされているにも関わらず、彼らは示し合わせたように標準的な「国語」で会話している。実際、当時占領地における「日本語」教師たちは常に正しい「日本語」を話すことを求められていた。例えば、方言学者であった東條操は外地に派遣される日本語教師の方言使用に危惧を呈し、「標準語を教へる以上、日語教師たるものは用心して自分の方言の臭みを除去しなければならない」[25]と「日本語」教師たちが自らの言葉を「標準語」の枠組みの中に律することを求めている。「マルセンの旦那」といった公僕／日本帝国主義の尖兵の一員として占領地で「日本語」教育の任に就いた彼らは、自らの言葉の中に隠された「臭み」を除去していくことで、それまで私的空間を保障するものであった「方言」を意識的に抑圧し、また「日本語」教師の職務に忠実であろうとした。その意味で、「花の町」に登場する日本人たちは、占領地において「正しく強く美しい日本語」（中島健蔵）を教授する過程で、自らの私的空間を意識・無意識的に「国語」の枠組みの中に律してしまっているのだ。

こうした「日本語」教育に関わる人間たちの過剰なまでの「国語」依存は、ある意味で現在国内外において「日本語」教育に従事する「日本語」教師たちにも通底する態度でもある。彼らは「日本語」学習者たちにより正しい「日本語」を教えるために、意識的に正確な「日本語」を話すように心がけることで、言葉が本来持つ多様性やダイナミズムを国家の枠組みの中に押し殺してしまっている。こうした「日本語」との窮屈で不自然な向き合い方の中では、本来「槌ツァ」や「九郎冶ツアン」、あるいは両者の争いを目にしていた「私」が感じていた自らの「母語」と「国語」との間に広がる距離はなおざりにされ、言葉はひたすら「国家」に回収された「いかめしい」言葉として硬直化していくしかない。

しかし、こうした「方言」抑圧によってなされる「日本語」教育

[25] 東條操「日本語の進出に伴ふ標準語と方言の関係」『帝国大学新聞』八九四号（1942年3月23日付）

を描く一方で、井伏は「国語」話者たちの間で完全な同一性が担保されているとも言いえない状況も描き出している。「ポーイズ・スクール」といった誤った看板の文字を指摘してきた小学校からの帰り道、ただただ「骨董屋で掘り出しものをするときの快適な気持ち」を想像する木山と「現地人たちに正しい日本語と仮名文字を普及させたいとばかり考えている」神田との会話は、「たがいに得手勝手で、ちぐはぐ」なもので、それでいて互いにそのことを気にかけている様子を見せることはない。正確な「国語」を話しながらも一向に相手の意を汲み取れず、またそのことを「いかれている」、「南方ぼけ」と呼ぶことによってコミュニケーションの不通を正当化している状態は、正しい「国語」／「日本語」を話している者同士であっても、容易にその意図が通じ合うことがないことを示している。謂わば、井伏は「日本語」教育によって浮かび上がる「国語」の「方言」抑圧といった事態を描き出す一方で、「日本語」といった同一性そのものに対しても、無条件に肯定することなく疑問符をつけているのだ。

だが、そうした「南方ぼけ」をした両者のディスコミュニケーションを差し引いてみても、占領地においてなされた「日本語」教育は、基本的に内地から来た「国語」話者たちと占領地において「日本語」を学習しようとしていた者たち双方が持っていた本来国家には回収されない私的言語空間を奪い取る言葉であったことは否めない。言葉を換えれば、そうした私的言語空間が奪い取られた状態においてこそ、「日本語」は「東亜共通語」としてその「正しさ」を持ち得ることが出来たのであった。

六、「日本語」に隠された他者性

以上、井伏の描いた二つの作品を中心に、日本国内における「国語」教育と東南アジア占領地における「日本語」教育の持つ連続性とその相違点を分析してきたが、最後にテクストにおける木山喜代三と占領下における現地人たちとの関係性に着目することで、日本といった国民国家のバックボーンを離れた「日本語」教育といった

ものが、果たして可能であるのかどうか考えてみたい。

前述してきたように、もし仮に「日本精神」と結びついた「日本語」教育が自らの私的言語空間を削り取っていくものであったとすれば、そうした占領地において「日本語」を使うことなく交わされた異言語コミュニケーションは、自らの言葉の中にある他者性を発掘していく過程でもあった。「現地人たちに正しい日本語と仮名文字を普及させたいとばかり考えている」神田ほど「日本語」教育に熱心ではない木山は、「日本語」教育によってすっかり硬直化してしまった自らの舌を解きほぐすように、「日本語」を話すことの出来ない現地人たちとの交流（その多くは英語によってなされている）を重ねている。木山のこうした態度には、神田のように現地住民の「日本語」を「美しく、正しく」矯正させるのではなく、むしろ彼らとの接触を繰り返す中で、自らの「日本語」が変化していくのを楽しんでいる節さえある。

「ジャラン・ジャラン」（散歩）や「マカン」（食べるもの・食べること）といった、昭南市における「みんなの人種の共通語」であるマレー語を会話の中に取り入れたかと思えば、今度は「キャンか、ノーキャンか」といった旧宗主国言語を織り交ぜたピジン語を屈託なく使用してみせていることからも、木山のそうした態度の一端を伺い知ることが出来る。中でも「支那人むすめ」たちが働く「サンサン食堂」という名の食堂では、華僑の女給たちが日本語を話せないことを知った木山は、音（言葉）によるコミュニケーションを中断して、互いが共有することの出来る視覚（漢字）による交流へと切り替えることで、次のような「会話」を楽しんでいる。

「儞飲啤酒嗎？」

一字ずつ丁寧に、ゆっくりと書いた。

それは「ビールを飲むか」という意味である。木山が「飲む」と日本語でいって頷くと、その給仕のおんなは次のようにカードに書き足した。やはり一字ずつ丁寧に書いて行った。

「啤酒！　我們秖有小瓶的、儞要食什麼？」

——ビールは小瓶しかないが、それにしても何を食べるかという質問である。木山は「小瓶でもいい」と答えたが、女給はナイフでゆっくりと鉛筆のさきをけずりなおして、次のように書き足した。実に悠長なものである。

「我們秖会中国話呀、如此、請儞用中國字写儞的意志在這紙上吧。」

——自分たちは支那語しかわからない。それでこのカードに漢字で答えを書いてくれというのである。

木山はカードを受取って、いい加減に漢字を書きならべた。

「我等要啤酒、小瓶的、沒有問題。而我要、這樣的食物、每樣兩碗。」

そして木山は、献立表の料理の名前を一つ二つ書き加えた[26]。

木山はこうしたコミュニケーションを、「厄介ではあるが、何か器用に行かないところが、反って愉快」だと述べ、その後もマルセンで働く「山田さん」に恋慕する女給への手紙を受け取り、「孤独的だと称する女給のため」に「不要傷心、我此信書給山田先生」と慰めの言葉をかけてやる。その様子を見た女給の一人は「山田先生的心太多」とマルセンの旦那に恋をする彼女を笑い、それを見た彼女も「南京虫先生是無頼漢」と文字を使って反撃することで、食堂内は大いに盛り上がる。

他者の言葉をコミュニケーションの場に積極的に取り入れるといった木山の行為は、現地語の保護を建前上であれ掲げていた当局の占領政策を補完する危険性を持つ一方で、礼儀を取り込んだ「日本語」教育において絶対的である上下関係（教師／学生）を、コミュニケーションの場において解体する作用を果たしている。実際、筆談による華人女給とのコミュニケーションの場面において、教える側／教えられる側といったものは存在していない。そこでは両者は漢字といった共通の文字を使って意志疎通しているに過ぎないのだ。こうした「厄介な」コミュニケーションを通じた後、一人残された

[26] 井伏鱒二『花の町　軍歌「戦友」』（前掲）84-85 頁

木山が口にする「平仮名を書きたい。俺は、平仮名で字を書きたい。片仮名でも悪くない」といったつぶやきは、「若草のやうに繁り、花びらのやうに美しくひろがつて」いく「日本語」を中国語やマレー語など、他言語に優越する言語として提示するのではなく、青木美保が指摘しているように、むしろその普及に努めれば努めるほど、そこに厳然として立ち現れてくる占領地における言語的多様性と、他言語との衝突の中で翻弄される「日本語」の脆弱な立場を嘆いているように見える[27]。

また、漢字を通じたコミュニケーションからは「日本精神」を宿しているはずの「日本語」が、実は古代から続く中国との絶え間ざる交流によって成り立っていることを暗示しているが（テクストにおいて、日中の歴史的なつながりの深さは骨董品の挿話を通じて何度も暗示されている）、こうした「日本語」内部に隠された他者性は、マルセンの旦那たちが躍起になって昭南市から駆逐しようとする「英語」の中からも見出すことが出来る。南方占領地における「日本語」教育の普及を目指しながらも、木山や神田たちが現地住民たちとの間で使用する言語はその大部分が英語によってなされているが、井伏はそうした英語による会話が生み出す不自然さを漢文的な翻訳調に置き換えて記している。

例えば、骨董品に目がない木山はたびたびベン・リヨンの隣家にある骨董店を経営する華僑老人シンフハの下を訪れるが、ベン・リヨンと違って日本語がまるで通じないシンフハ老人との間で交わされる英語による会話を井伏は次のように日本語へと置き換えている。

> 「私は重ねて言う。これは巻紙ではない。日本より将来された古代日本の経文である。この文字の筆致から見れば、これは穂先の短い筆を使って書いたものと思われる。この筆致の傾向は日本に於いては、いつの世の時式であったかしらないが、支那ではこれは古く千年前に於ける書風であった。おそらく貴官

[27] 青木美保「井伏鱒二における社会批評の視点について――作品「花の町」を軸にして」（『比治山女子短期大学紀要』二十二号、1988年）

は、この雄渾なる書風と荘重なる筆触との融合に、浄心の極佳を覚えられるものと私は信じたい。この金文字の美しい色合いは、どんなにかその世代その国の乾坤それ自体が豊饒であったかを偲ばせるのである。」[28]

「私は重ねて言う」、「私は信じたい」といった英語の会話内容が分かるような翻訳の仕方から、「貴官」、「雄渾なる書風」、「乾坤それ自体」など、如何にもぎこちない表現は、シンフハ老人との会話だけでなく、テクスト随所に見受けられる。また、寡婦リヨン・アチャンに河野軍曹の行方を再度詰問されたときも、木山（井伏）は同様に英語でなされた会話を「まして況んや、多感をそそる淑女の囁きを通訳する場合、吾人は悪意をもって通訳した覚えは更にないのである」など、口語とは明らかに異なる漢語調の文章に置き直すことによって、両者のコミュニケーションに一種の齟齬と距離があることを表現している。

こうした会話から垣間見られるのは、母語ではない言葉を使ったコミュニケーションが持つある種の「もどかしさ」と、漢語といった東アジア世界における「国語」成立以前のコミュニケーション方法が、「英語」という第三者の言語を仲介することによって立ち現れているといった奇妙な事態である。しかし角度を変えて見れば、こうした漢語調の文章は、ある意味で「国語」成立時における翻訳作業を彷彿とさせる。明治維新後、「別二字ヲ選ビ、語ヲ造」（西周）ってきた明治知識人たちは、西洋の知識の多くを英語やフランス語からの「翻訳語」によって普及してきたが、すでに多くの研究者たちによって指摘されているように、現在日本において使用されている「国語」とは、こうした西洋からの「翻訳語」によって成り立っていた[29]。当時、漢語的素養を備えていた明治知識人たちの多くは、西洋言語を一度漢語的表現に置き換えてから、それをいまだ座標の

[28] 井伏鱒二『花の町　軍歌「戦友」』（前掲）40 頁。
[29] 「翻訳語」と「日本語」の関係に関しては柳父章の一連の研究がある。例えば、柳父章「翻訳語成立事情」（岩波文庫 1982 年）、「近代日本語の思想―翻訳文体成立事情―」（法政大学出版社 2004 年）など。

定まらぬ「国語」へと再翻訳する必要があった。そのため、西洋言語から漢語を通じて紹介された「翻訳語」の多くは、本来柳父章が指摘するように「生硬な語感を持った漢字」によって成立しており、「違和感のある異質な会話」によって占められていた。実際、「国語」黎明期に育った「『槌ツア』」における「私」の幼少時代には、こうした「異質な会話」に「いかめしさ」を覚え、使用するのがいまだ「時期尚早」だと考えられていた。しかし、「国語」が日本軍のアジアへ進出にともなって「日本語」へと姿を変えていく中で、そうした「異質」さは徐々に「正しく美しい」「日本語」の本質を示すものとして無意識下へと抑圧されていくこととなったのだった。言葉を換えれば、「日本精神」を持った「日本語」は、自らの中にあるそうした他者性を徹底的に駆逐していくことによってのみ、その正当性を主張し得たのだ。

木山と現地住民たちの間の会話からは、西洋言語（英語）と漢語によって造り上げられた現在の「日本語」／「国語」を、翻訳といった作業を通じて敢えて崩すことによって、かつて国内の同一性を担保するものであった「国語」と、またそこからアジア各国に「飛躍」していこうとする「日本語」の持つ恣意性を暴こうとする姿勢を読み取ることができる。それは、一旦明治の知識人たちによって「濾過」された「日本語」を、翻訳を通じて再び「凝固」させる試みでもあるのだ。その意味で、英語を介した会話が不自然であるのは、他言語を仲介とした「もどかしさ」以上に、「国語」／「日本語」といった人工言語を基礎とする会話自体が元来不自然なものであるからなのかもしれない。

七、結びに

以上見てきたように、「国語」黎明期から「日本語」黎明期にかけて活発な執筆活動を行った井伏は、言語の持つ政治性といったものに極めて敏感な作家であったが、そこには大きく分けて二つの限界が存在しているように思われる。まずひとつは、時代的な制限であ

る。占領地における自己検閲の問題もあって、「国語」教育と「日本語」教育が持つ連続性とその政治性がテクストにおいて極めて曖昧な形でしか提示されず、また何よりも当時シンガポールで起こった華僑虐殺事件が全く示唆されることなくやり過ごされてしまっているといった点は、テクストの批評性を否が応でも弱めてしまっている。そして二つ目は、井伏が戦後において自らの占領経験を作品の中で思想化し得なかったといった点である。敗戦とともに占領／被占領といった関係性が逆転する中で、井伏は英語と日本語との関係性に極めて鈍感であったと言わざるを得ない。そこでは占領が占領として意識されず、ある種の「解放」として受け止められた戦後的体質と関係しているのかもしれないが、何はともあれシンガポールでの占領経験が戦後井伏作品の中で米軍による占領経験と重ねて語られることは最後までなかった。あるいはそれは戦前外地へと無限に拡大していった「日本語」が、再び敗戦によって民族の言語＝「国語」として収束していく中で無意識化された結果であったのかもしれない。

最後に、テクストを分析してきた結論として、簡単に「日本語」教育の今後についての試論を述べておきたい。戦前・戦後を問わず、常に国家という枠組みに規定されてきた「日本語」は、戦後は高度経済成長の流れに乗ってかつての「東亜共通語」としての地位を復権するようにアジア各地に再進出を果たしてきた。そこでは「日本語」は英語に次ぐ「東亜共通語」として常に大きな影響力を保ち続けてきたが、そのことはとりもなおさず「日本語」が日本という国民国家に強く規定されてきた言語であったことと関係している。

しかし、もし仮に国民国家の枠組みを離れた「日本語」教育といったものが可能であるとすれば、それは戦前の井伏が試みたように、「国語」教育に孕まれていた同化主義的傾向を徹底的に洗い出し、そこから生まれた「日本語」教育との関係性を曝け出すことでしかあり得ない。その上で、言葉の中に孕まれた他者性を意識し、そうした他者性を他言語との関係性の中で認識しながら、自らの言葉を

異化し続けること。こうした作業は何も近年急速に注目を集め始めた外国人日本語作家や外国語によって創作を続ける日本人作家だけに許された専売特許ではない。「日本語」教育に携わる者たち全てが母語と「国語」、そして「国語」と「日本語」との間にある距離を慎重に見極めながら、自らの言葉に孕まれた他者性を認識する作業を延々と繰り返すことによってのみ、「日本」という枠組みに囚われてきた「日本語」教育を国民国家の枠組みから解き放つことが出来るのではないだろうか。

テキスト

井伏鱒二（1985）「井伏鱒二自選全集　第一巻」新潮社
井伏鱒二（1996）「花の町　軍歌『戦友』」講談社文芸文庫

参考文献

青木美保（1988）「井伏鱒二における社会批評の視点について――作品「花の町」を軸にして」『比治山女子短期大学紀要』二十二号
石剛（1993）「植民地支配と日本語」、三元社
井伏鱒二（1996）『徴用中のこと』、講談社
小沢有作（1971）「日本植民地政策論」『人文学報』No82、東京都立大学
川端美樹（1988）「第二次世界大戦中の日本植民地・占領地における日本語教育 - マレー半島を中心として」『日本語と日本語教育』17 、慶応義塾大学国際センター
神谷忠孝、木村一信編（1996）『南方徴用作家　戦争と文学』、世界思想社
子安宣邦（2003）『日本近代思想批判―一国知の成立―』、岩波現代文庫
神保光太郎（1943）「昭南日本学園」、愛之事業社
滝口明祥（2012）「井伏鱒二と『ちぐはぐ』な近代―漂流するアクアリティ」、新曜社

西川長夫（2002）『戦争の世紀を越えて　グローバル化時代の国家・歴史・民族』、平凡社
水原明人（1994）『江戸語・東京語・標準語』、講談社現代新書
宮脇弘幸（1989）「南方占領地における日本語教育と教科書‐マレーシア・シンガポールの場合（1942—1945）」『成城文芸』126 号
安田敏朗（1997）『帝国日本の言語編成』、世織書房
安田敏朗（2006）「『国語』の近代史　帝国日本と国語学者たち」、中公新書
柳父章（1982）「翻訳語成立事情」、岩波文庫
柳父章（2004）「近代日本語の思想—翻訳文体成立事情—」、法政大学出版社